平成29年度
鹿児島大学
FD報告書

鹿児島大学FD委員会
KAGOSHIMA UNIVERSITY Faculty Development

平成29年度　鹿児島大学FD報告書

CONTENTS

Ⅰ. 平成29年度FD報告書作成にあたって

■ FD委員会委員長（教育担当理事） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅱ. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針 3

Ⅲ. 鹿児島大学のFD活動

第1部 全学的取組 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

■ 新任教員FD研修会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

■ FD・SD合同フォーラム ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

■ 学生・教職員ワークショップ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

■ 鹿大版FDガイド第14号、第15号の発刊にあたって ・・・・・・・・・・・・ 19

第2部 各学部・研究科のFD活動報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

■ 共通教育センター

■ 法文学部、人文社会科学研究科

■ 教育学部、教育学研究科

■ 理学部

■ 医学部

■ 歯学部

■ 工学部

■ 農学部、農学研究科

■ 水産学部、水産学研究科

■ 共同獣医学部

■ 理工学研究科

■ 医歯学総合研究科

■ 保健学研究科

■ 臨床心理学研究科

■ 連合農学研究科

I 平成29年度FD（ファカルティ・ディベロップメント）報告書作成にあたって

鹿児島大学FD委員会委員長（教育担当理事）
清原 貞夫

鹿児島大学FD委員会委員長（教育担当理事）に就任して５年となり、本学のFD活動についても、その意義と理解は徐々に定着してきました。各学部の教育研究職員、総合教育機構メンバー、事務系職員みなさんの努力の下、年間を通してそれぞれのディベロップメントに向かって精進してまいりました。

FD委員会のミッションは、本学が掲げる教育理念・目標を達成するための教員の教授法の開発、授業力アップ、学習効果をあげるための学生支援です。昨今ではさらに、各学部のカリキュラム・プログラムの再構築への提言ばかりでなく、学生の質と量を伴った学修時間の増加に貢献することが求められています。平成22年度以降のFD委員会の活動の詳細は、HP（https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/fd.html#000825）をご覧ください。

平成29年度も今まで同様、「FD研修会」、「学生・教職員ワークショップ」、「FDガイド」の3つのワーキンググループが企画・運営し、「FD・SD合同フォーラム」は教育改善担当学長補佐を中心として運営に携わる体制としました。

継続的な取り組みとして以下の5項目を行いました。

・新任教員FD研修会「単位の実質化からアクティブ・ラーニングを考える」
・FD・SD合同フォーラム「『地域に貢献する高等教育機関』にどう貢献するか」
・学生・教職員ワークショップ「学生の主体的な学びを促すには」
・FDガイド第14号「講義形式の授業で対話を促す手法(1)～授業シートを活用してみよう～」、第15号「講義形式の授業で対話を促す手法(2)～話題の作り方とディスカッションの活用～」
のテーマで発行した。
・平成26・27・28年度に引き続き、大学IRコンソーシアムの学生調査（１年生調査、上級生調査）の実施
また、平成29年度も全専任教員の75%以上がＦＤ活動に参加いたしました。
引き続き、全学をあげてＦＤ活動に取り組む所存です。

FD活動は教職員個々人の向上意識と自発的な取り組みが不可欠であり、教育を改善するには多大な時間と労力が必要です。授業力アップには各教員の最も大切にする価値に根ざすことが肝要であり、その中心的「核」となるものは各人の研究領域での活動であると思います。したがってFDでは研究活動が教育に密接に関わることを自覚し、教授法の向上とキャリア形成を同時に目指し、全教職員が一歩一歩粘り強く、研究・教育活動を継続推進してもらいたいと念じています。

II 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針

平成26年7月17日
教育研究評議会決定

鹿児島大学(以下「本学」という。)は、鹿児島大学学則(平成16年規則第86号)第２条において、鹿児島大学憲章の下に、広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、もって学術文化の向上に寄与するとともに自主自律と進取の精神を持った有為な人材を育成することを目的とすると定めている。本学は、この教育研究上の目的に根ざした人間を育成することができるように、質の高い教育を実施する責務を負っている。そのためには、大学として、教育の内容や方法の開発・改善を組織的かつ継続的に行い、より実質的なものへとしていく必要がある。

(目的)

第１　この指針は、本学におけるファカルティ・ディベロップメント(以下「FD」という。)を推進していくために必要な事項を定め、教育の内容や方法の開発・改善及び教育研究に関する研修についての責務を明記することで、教育の質の向上及び学生支援の円滑な遂行を図ることを目的とする。

(定義)

第２　この指針において、FDとは、大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組を指す。

２　この指針において、「部局等」とは、学部、研究科及びセンター等、FD活動において組織的な取組を実施する主体を指す。

３　この指針において、「教員」とは、本学の常勤及び非常勤の教員を指す。

(大学の責務)

第３　本学は、その教育理念や教育目標を実現するために、全学のFD活動の内容や方法を点検・評価し、その結果を踏まえ、適宜、各部局の環境整備及び各教員のFDへの取組に対して支援を行う。

(部局等の責務)

第４　部局等は、学部・学科等のカリキュラムが教育目標やアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーと整合しているかどうかを点検・評価し、必要に応じて、カリキュラムの開発・改善に努め、教育の質の向上を図る。

(教員の責務)

第５　本学の教員は、自らが担当している授業の目標やシラバスの検討を随時行い、学生理解・支援、授業内容、授業方法、教育評価及びカリキュラム開発・改善に関する知識・技能を高めることに努める。

平成29年度　FD活動一覧

6月	共通教育前期授業公開・授業参観（6/26～7/7）
8月	鹿大FD報告書（平成28年度）の作成
9月	鹿児島大学FDガイド第14号の作成
	新任教員FD研修会（9/11）
10月	FD・SD合同フォーラム（大学地域コンソーシアム鹿児島FD・SD活動事業部会と共催）（10/7）
11月	大学IRコンソーシアムアンケート実施
12月	学生・教職員ワークショップ（12/14）
2月	鹿児島大学FDガイド第15号の作成

平成29年度　FD委員会委員名簿

所　属	氏　名	所属ワーキンググループ
理事（教育担当）	清原 貞夫	
学長補佐（教育担当）	大前 慶和	FDガイド
高等教育研究開発センター長	小山 佳一	
高等教育研究開発センター専任教員	伊藤 奈賀子	学生・教職員ワークショップ
高等教育研究開発センター専任教員	出口 英樹	FD研修会
共通教育センター専任教員	渡邊 弘	FDガイド
法文学部	米田 憲市	FDガイド
教育学部	齋藤 美保子	FDガイド
理学部・理工学研究科	伊東 祐二	学生・教職員ワークショップ
医学部	木佐貫 彰	FD研修会
歯学部	後藤 哲哉	FD研修会
工学部	木下 英二	FD研修会
農学部	坂巻 祥孝	FDガイド
水産学部	鳥居 享司	学生・教職員ワークショップ
共同獣医学部	大和 修	FD研修会
医歯学総合研究科	田川 まさみ	学生・教職員ワークショップ
臨床心理学研究科	松木 繁	学生・教職員ワークショップ

Ⅲ 鹿児島大学のFD活動

第1部

全学的取組

新任教員FD研修会

1. 概要

テーマ 「単位の実質化からアクティブ・ラーニングを考える」
日　時 平成29年9月11日(月)13:30～16:30
場　所 郡元キャンパス 学習交流プラザ2階 学習交流ホール
対　象 平成27年7月2日～平成28年7月1日の間に本学に採用された新任教員
参加者 28名

2. 研修会の趣旨

本企画は、平成28年7月以降に本学に着任した新任教員を対象とした研修会であり、本学の現状を踏まえつつ、本学が掲げる教育理念、教育技能の習得とその実践を促すために取り組むものである。特に「単位の実質化」と「アクティブ・ラーニング(主体的学び)」は今日の大学教育の大きなキーワードであり、またこの両者は密接に関連するものである。

そこで、この2つはいかなる意味で切り離せないテーマなのか、またその文脈において求められている教育のあり方はどのようなものか、参加者自身のまさに主体的・能動的な活動を通じて理解を深め、その理解を本学の教育改善につなげることができるよう、学内講師による講演、事例紹介、グループ討議による研修会を実施した。

3. 当日のプログラム

司会進行:後藤 哲哉

時　間	内　容	担　当
13:30～13:40 (10分)	開会挨拶(趣旨説明)	教育担当理事・FD委員会委員長 清原 貞夫
13:40～13:50 (10分)	ミニ・レクチャー 「本学の現状を踏まえた単位の実質化とアクティブ・ラーニング」	話題提供 高等教育研究開発センター 出口 英樹
13:50～14:20 (30分)	事例紹介 「『初年次セミナー』における単位の実質化とアクティブ・ラーニングの現状」	話題提供 高等教育研究開発センター 伊藤 奈賀子
14:20～14:45 (25分)	グループ・ディスカッション　その1 ①自己紹介・アイス・ブレイク ②イントロダクション(鹿児島大学の現状について)	ファシリテーター 各 FD委員(WGメンバー)
14:45～15:00 (15分)	休　憩	
15:00～16:00 (60分)	グループ・ディスカッション　その2 ③テーマ討議「どうすれば学生をアクティブ・ラーナーにできるか？ ～「単位の実質化」という視点でアクティブ・ラーニングを考える～」 ④リフレクション(グループ内での振り返り)	ファシリテーター 各 FD委員(WGメンバー)
16:00～16:25 (25分)	プレゼンテーション 各グループの成果を参加者全員で共有	各 FD委員(WGメンバー)
16:25～16:30	閉会・アンケート記入	
16:30	解散	

4.研修会のまとめ

まず、清原貞夫教育担当理事（ＦＤ委員長）より、本学が取り組む全学的な教育改善の端緒として、平成28年度より共通教育改革に取り組んでいることが紹介された。学力の3要素にも触れつつ、本学が養成する学士の質保証のために、単位の実質化（授業時間外学習の確保）とアクティブ・ラーニングは不可欠であることが述べられた。

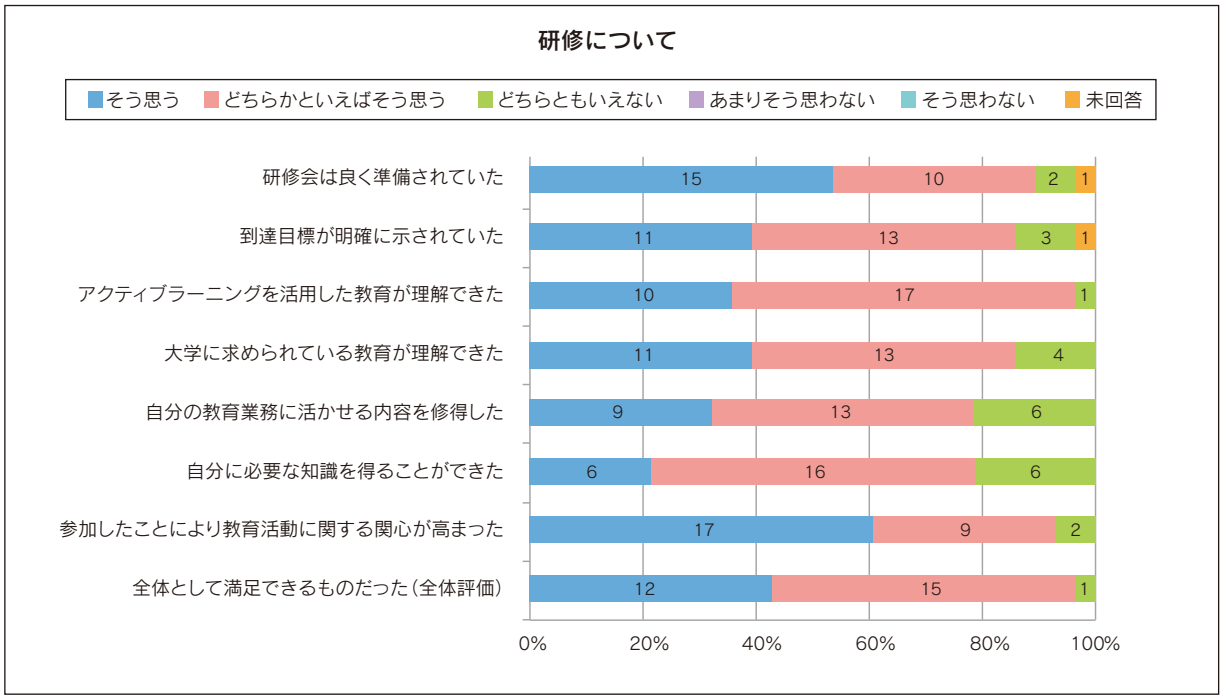
続いて、高等教育研究開発センター出口英樹准教授（ＦＤ委員）による「本学の現状を踏まえた単位の実質化とアクティブ・ラーニング」と題するミニ・レクチャーが行われた。本学の現状を踏まえつつ、そもそも「アクティブ・ラーニングとは何か」、「大学における単位制度とは何か」について説明し、本学における「単位の実質化とアクティブ・ラーニング」について言及があった。

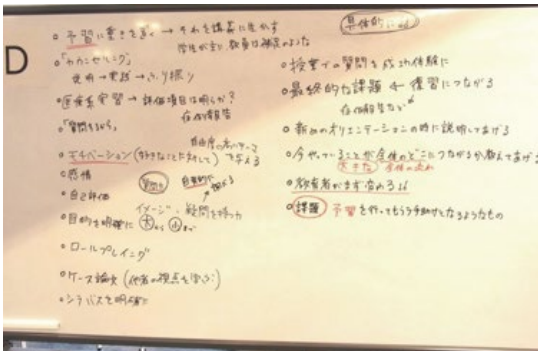
その後、同センターの伊藤奈賀子准教授（ＦＤ委員）から「『初年次セミナー』における単位の実質化とアクティブ・ラーニングの現状」と題して事例紹介が行われた。上記の共通教育改革の核となる初年次セミナーについて、その意義を確認しつつ、方法論としてのアクティブ・ラーニングを紹介した。

グループ・ディスカッションでは、6グループに分かれて「どうすれば学生をアクティブ・ラーナーにできるか？～「単位の実質化」という視点でアクティブ・ラーニングを考える～」というテーマで討論が行われた。各グループにおいて部局や学問的専門性の特徴を交えつつ、熱心な議論が行われた。その後の1分間のスピーチの中で、今回のシンポジウムでの学びを参加者全体で共有することができた。

事後のアンケートでも、「参加したことにより、教育活動に関する関心が高まった」「大学に求められている教育が理解できた」などの全項目で、高い満足度が示された。

（事後アンケート結果より抜粋）





（グループディスカッションの様子）

【自由記述意見例】

アクティブ・ラーニングについて、欲しい情報があればお書きください。

●授業（アクティブ・ラーニング）に使えるツール等があれば、webなどを通じてご紹介いただきたいです。
●具体的な講義での事例をどしどし広報してほしい。
●アクティブ・ラーニングが浸透すると、修了時のGPAよりも卒論研究にこそ成果が現れるのではないかと思われるのですが、そこにも注目して、初年次セミナーの 効果を計るような仕組みがあればいいかと思います。
●アクティブ・ラーニングに関する自己評価の尺度があれば知りたいです。
●具体的な事例を知る機会がほしい。
●学内でのアクティブ・ラーニングの実践例について情報が欲しい。
●学生側からの生の意見を知りたい。
●アクティブ・ラーニングの様々な手法を身につけるためのセミナー等を開催して欲しい。
●アクティブ・ラーニングに関する成功例について具体的に知りたい。
●鹿大における具体的なアクティブ・ラーニングの定義。
●どのようなやり方があるのか（アクティブ・ラーニングでない方法）。アクティブ・ラーニングの効果。アクティブ・ラーニングを受けた学生の思う効果や意見。これからの課題。
●具体的に実践されている方法を教えていただけるともっとよかった。
●他大学の取り組み、小・中学校また高校での取り組みはどうなのか。
●具体的な成功例と失敗例。アクティブ・ラーニングを実践している著名人の講演。
●具体的な活用方法や例を明示してもらえると実践しやすいと思う。

本研修会及び今後参加を希望するFD研修会のテーマについて、ご意見・ご要望があればご記入ください。

●大学の先生方が、真剣に授業を変えようという意気込みを感じることができてうれしかった。
●ご準備有難うございました。
●アクティブ・ラーニングの導入により大学が変わっていくことは大変よいことだと思う。学生がその結果としてどう変わっていくかをどう実感をもってどう測定するのか、何を指標とするのか、そのへんまでそろそろ視点を広げる時期にきているのではないか。
●また参加したい。
●今後、学生を指導・教育するにあたって非常に有用な情報が得られたと思います。他学部の先生と教育について話し合える機会は、なかなか無いので貴重な体験でした。
●大きなテーマでは意見を述べるだけであって、より実現化するためにはもっとテーマを限局するなり、もっと時間をかけて行うべきである。
●グループワークがあるFDは非常に良いと思います。シラバスの書き方、科研の申請書の書き方のグループワークがあると助かるのではと考えます。
●色々な学部の先生方の話を聞くことができ、刺激になりました。
●「いい質問力」を身につける実践法。

（文責：高等教育研究開発センター　出口 英樹）

平成29年度 FD・SD合同フォーラム

1. 概要

テーマ　「地域に貢献する高等教育機関」にどう貢献するか
日　時　平成29年10月7日(木)13:00～16:30
場　所　郡元キャンパス　法文学部1号館201号教室
参加者　61名

2. 目的

今年度の本フォーラムは、地方にある高等教育機関共通のミッションである「地域貢献」に対して、個々の教職員がどのように関わるべきか、また関わることができるかを考えることを目的として企画した。このような観点に基づいてFD及びSDを考えた場合、各高等教育機関が行うべきこととはどのようなものかは各々の機関によって異なる。しかし、同じ鹿児島県に立地する高等教育機関として共通の課題もあり、互いの意見交換を通じて見出される新たな知見もあるのではないか。このような意図に基づき、先進的な事例に関する話題提供を受けた上で、参加者同士のグループ・ディスカッションを行うという2部構成とした。

3. 話題提供

講師：中西 弘充氏（信州大学 キャリア教育・サポートセンター 講師）

中西氏からは、「信州大学におけるCOC事業およびCOC+事業の取組～信州アカデミア構想～」と題した基調講演を受けた。信州大学は、COC事業に採択された76校のうち、中間評価に当たる平成28年度評価においてS評価を受けた7校（そのうち、国立大学は4校）のうちの1つである。また、日本経済新聞社が毎年示している「全国大学地域貢献度ランキング」では、2012年以降4年連続で総合1位を獲得している。

信州大学は広い長野県内に複数のキャンパスを抱えており、教育上は様々な難しさがある一方、地域貢献という観点では複数の拠点を有していると前向きに捉え、信州大学の特徴的な研究を活かして積極的に地域課題の解決に関与している。そのために、様々な専門分野・所属の教員による共同研究が極めて活発に行われており、大学もそうした取り組みを積極的に支援している。地域課題には様々な側面があり、単一の専門性のみで解決できる事例は多くないと思われることから、各教員が共同研究を積極的に進められるような仕組みづくりは重要である。そのためには、研究者情報の公開・発信の他、研究費助成などについても整備が求められる。

また、信州大学独自の制度である「信州大学連携コーディネータ委嘱制度」も特筆すべきである。この制度は、信州大学の地域連携推進のために産学官金連携の一層の進展を目的としている。具体的には、行政機関等に所属する学外者のうち、信州大学が指定する一定の条件を満たした者をコーディネータとして認定し、連携活動の実施に関与してもらうというものである。このコーディネータに期待されているのは、地域企業と信州大学との仲介による連携拡大であり、それによってより具体的には相談研修や共同研究件数、地域課題の解決等が期待されている。

教育については、「信州アカデミア構想」の一環として実施されている「地域連携プロフェッショナル・ゼミ」が特徴的といえる。COC及びCOC+事業においては多くの大学が地域課題の解決に貢献できる人材の育成を目的の1つ

として掲げており、学生を地域に送り出して実践させるような授業も数多く見られる。しかし、信州大学の場合、それだけにとどまらず、地域人材を講師として招き、事業創出を支援する等、ごく一般的な学生を対象とした教育ではなく社会教育を重視している点に特徴がある。また、取り組み全体としては、受講生が実際に事業を創出したり、そうした元・学生が、今度は地域講師として信州大学の取組に関与したりするなどの循環も見られる。このような継続的な仕組みを確立しているという点で、信州大学の取組は示唆に富んだものだといえる。

4. グループ・ディスカッション

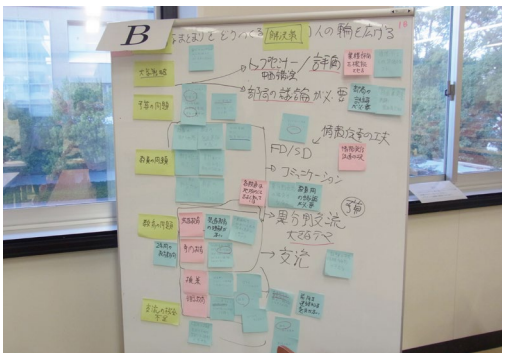
休憩後、グループごとに、「『地域に貢献する高等教育機関』を実現するために必要なことは？」とのテーマでグループ・ディスカッションが行われた。様々な所属機関の教職員が一堂に会することから、機関や立場を越え、個人が抱える課題も越えて普遍的に解決すべき課題とは何かについて共同で考え抜くことを目指したものであった。

「地域に貢献する高等教育機関」というミッションを頭では理解していても、専門分野や業務内容次第で地域とのかかわりを持ちにくい教職員もいる。このため、「地域に貢献する高等教育機関」というミッションをいかに自分事として認識してもらうかが大学にとっての課題であり、支援の仕組みを構築するだけでは十分機能を果たすものにはならない

全ての教職員が同程度に地域貢献の重要性を認識しているということは、現実的にはまず考えられない。このため、極めて意識も意欲も高い教職員対象のFD・SDと、逆に自分には無関係だと考えている教職員向けのそれとは内容も時間配分も全く異なるものになる。そうした状況を踏まえ、個々の教職員のニーズに応じたFD・SDを企画する必要がある。

まだCOC及びCOC+事業とも助成期間内であるが、COC事業については来年度、COC+事業については再来年度で助成期間が終了である。助成期間終了後も地域貢献に対する鹿児島大学のミッションが継続するものと思われるものの、具体的にどのような仕組み及び予算で行うかは考える必要がある。鹿児島大学がどのように地域に貢献するか、またそのための仕組みをいかに構築するかが問われるのはこれからである。

（文責：伊藤 奈賀子）



平成29年度学生・教職員ワークショップ

1. 概要

テーマ　学生の主体的な学びを促すには
日　時　平成29年12月14日(木)16:10～19:10
場　所　郡元キャンパス　学習交流プラザ2F　学習交流ホール
参加者　43名

2. 目的

今年度の本企画の目的は、学生が主体的に学べるようになるため、主体的に学ぶ学生を育成するために考えるべきことや行うべきことについてともに考えを練り上げることにあった。そこで設定したテーマが「学生の主体的な学びを促すには」である。

ところが、主体的な学びというのは、学習者である学生自身にとっても、それを促す役割を負った教職員にとっても非常に難しい。主体的な学びは昨今の大学における共通課題であり、どの大学でもこの課題の解決に取り組んでいる。しかし、現実には何もせずに見守るだけで学生が主体的に学べるようになるわけではない。その一方、学生の学習時間を伸ばすことのみに注力すれば、そこで行われるのは果たして主体的な学びといえるか、疑問が生じる。

こうした「主体的な学び」をめぐる特有の難しさを背景とし、今回は学習科学の観点からの話題提供を踏まえつつ、参加者がともに主体的に学ぶための要素や課題について考えることとした。参加者自身が主体的な学びについて主体的に学べるよう留意して、企画全体の設計を行った。

3. 話題提供

講師：時任 隼平氏（関西学院大学 高等教育推進センター　講師）

教育工学を専門とする時任氏からは、まず、「主体性とは何か」について考えることが必要であるとの問題提起があった。これは、本企画に限ったことではなく、そもそも主体性あるいは主体的な学びとは何かについての考え方が学生と教員とで一致していない場合には、両者にとって良い授業とはならないためである。互いがそれぞれの立場に基づきつつ、主体的な学びとそれを踏まえた学びがいのある授業についてともに考え、イメージを共有することの重要性が指摘された。このイメージの共有により、学生は学ぶことに対して一層意義を見出すことが可能になる。また、教員も授業の設計及び運営に当たり、注力すべき点が明確になり、より高い成果を挙げられる可能性が高まるといえる。

このような問題提起を受け、時任氏の勤務校である関西学院大学での取り組みが紹介された。

関西学院大学では、シラバス作成に当たり、学力の3要素をさらに細分化する形で教員が授業を通じて育成しようとする能力をより明確に示す試みが行われている。学力の3要素とは、「知識・技能」「思考力・判断力、表現力等」「主体的に学ぶ態度」を指している。このうち大学では、「知識・技能」「思考力・判断力、表現力等」に深く関わる知的活動の比重が高い傾向がある。しかし、知的活動の中には、知識の記憶を重視するものもあれば、得た知識を活用できるようになることを目指すものもある。また、自身の学習過程を的確に分析し、その後の学習改善につなげることも重要な知的活動の1つである。

関西学院大学の試みは、授業に対する教員の考えをより分かりやすい形で学生に示すことにより、学生が自身の関心や目標に応じた授業選択をできるようにすることを目指したものである。これにより、学生は意欲的に授業に向かうことが可能になることから、主体的な学びを促すための具体的手法の1つだといえる。

その後、「学びがいのある授業」についてグループワークが行われた。参加者それぞれが学びがいのある授業について考え、それぞれの考えを示し合うことを通じて認識を共有することができた。学生と教員の考えは密接につながっており、決してかけ離れてはいない。そのことを知るには、互いの考えを知る機会が必要であり、シラバスを通じた情報提供や本企画のように実際に意見交換をする機会の意義は大きいものといえる。

4. グループ・ディスカッション

休憩後、グループごとに、学生が主体的に学ぶためにすべきことについてのディスカッションが行われた。グループは全て学生と教員が混在する形で構成され、両者がともに考え、取り組むべきことと、それぞれが行うべきことについての検討がなされた。参加者はいずれも前向きに議論に参加しており、教員の教育に対する思いと学生の学習に対する思いが強く感じられた。

最後はグループごとに成果の発表が行われた。鹿児島大学における教育改善に活かすべき事項も具体的にいくつか挙げられたことから、今後の展開につなげていきたい。一方、専門性を高めるという観点から一定の知識内容を教えなければならない教員側と、意欲をもって学ぶための手立てや工夫を求める学生側とで必ずしも認識が一致しない部分も明らかになった。必要な知識内容や能力を確実に身に付けつつ、主体的に学ぶ学生を育てるにはどうしたらいいかという本企画の根源的な問いについては、今後も考え続けることが必要である。

本企画は、学生と教職員がそれぞれの立場を踏まえつつもともに考え、議論し合うことを重視したものである。立場は異なっていても、同じ鹿児島大学に籍を置くものとして、大学をより良くしていくためにともに意見を出し合い、行動に移していくための機会となれば幸いである

（文責：伊藤 奈賀子）

2017.12.14

学生・教職員ワークショップ事後アンケート

本日は、ワークショップへのご参加ありがとうございました。FD委員会では皆様のご意見を参考に活動を改善し、新たな企画を計画いたします。皆様の率直なご意見をお聞かせください。

（選択の部分は、番号を〇で囲んでください。）

1. ① 学 生　② 教 員　③ 職 員

2. 本日のワークショップは、何で知りましたか。
①メールでの案内　②学内ポスター　③友達から聞いて　④先生から聞いて
⑤その他（　　）

3. 本日のワークショップは有意義でしたか。
⑤非常にそう思う　④少しそう思う　③どちらでもない　②あまり思わない　①全く思わない

4. あなたは、積極的に参加しましたか。
⑤非常にそう思う　④少しそう思う　③どちらでもない　②あまり思わない　①全く思わない

5. このワークショップに参加して、何が得られましたか。

6. ワークショップに対するご意見等を自由にお書きください。

※今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、お書き下さい。

ご協力ありがとうございました。

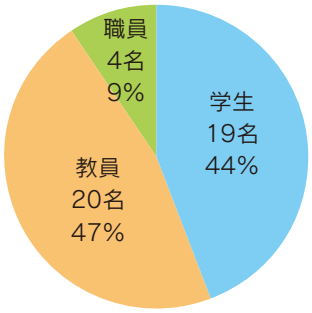
平成29年度 学生・教職員ワークショップ「学生の主体的な学びを促すには」

事後アンケート（まとめ）

①ワークショップ参加者

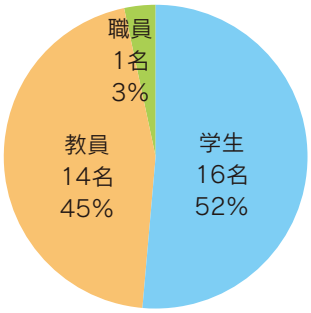
事後アンケート（まとめ）

学　生	19名
教　員	20名
職　員	4名
合　計	43名



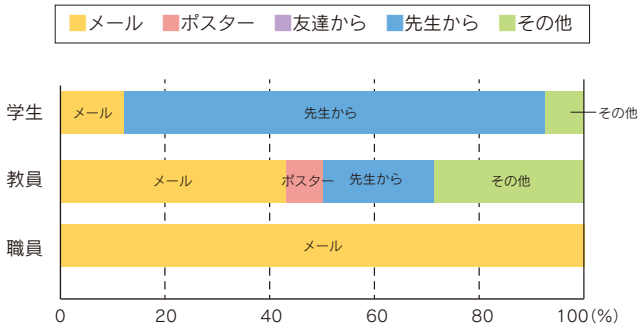
アンケート回答者

学　生	16名
教　員	4名
職　員	1名
合　計	31名



②本日のワークショップは、何で知りましたか。

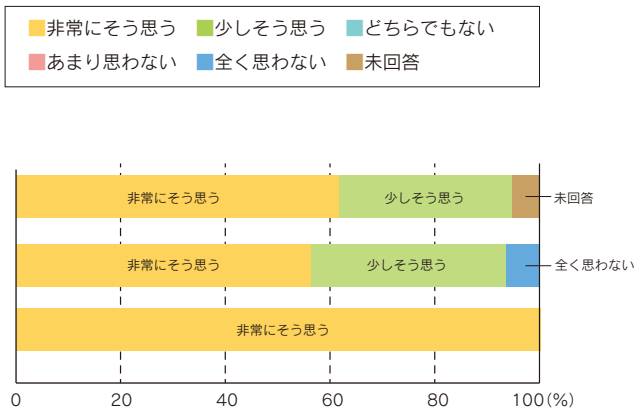
	学生	教員	職員	全体
メールでの案内	2	6	1	9
学内ポスター	0	1	0	1
友達から聞いて	0	0	0	0
先生から聞いて	13	3	0	16
その他（※）	1	4	0	5
計	16	14	1	31



（※）その他：ホームページを閲覧して（1名）、FD委員として（3名）、未回答（1名）

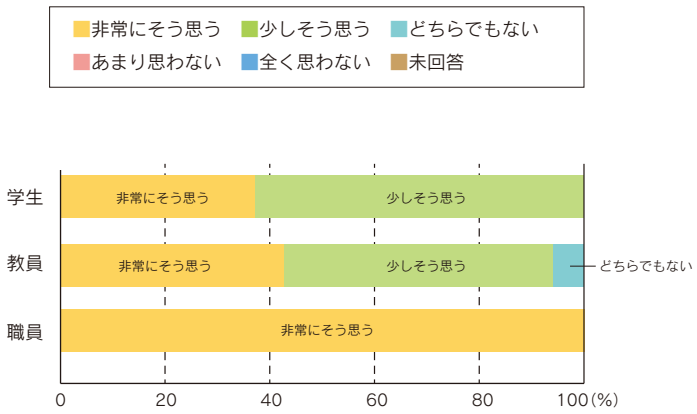
③本日のワークショップは有意義でしたか。

	学生	教員	職員	全体
非常にそう思う	10	8	1	19
少しそう思う	5	5	0	10
どちらでもない	0	1	0	1
あまり思わない	0	0	0	0
全く思わない	0	0	0	0
未回答	1	0	0	1
計	16	14	1	31



④あなたは、積極的に参加しましたか。

	学生	教員	職員	全体
非常にそう思う	6	6	1	13
少しそう思う	10	7	0	17
どちらでもない	0	1	0	1
あまり思わない	0	0	0	0
全く思わない	0	0	0	0
未回答	0	0	0	0
計	16	14	1	31



［自由記述］

⑤このワークショップに参加して、何が得られましたか。
⑥ワークショップに対するご意見等を自由にご記入ください。

学生

⑤学生側の意見しか普段聞くことができないので、今日教員側がどういう思いで授業をされているのか知ることができた。主体性をつけるには、学生側、教員側そして大学側の改善点が見つかったので、これから意識を高くもって大学生活を過ごしていきたいと思った。
⑥違う立場の意見が聞けて非常に良い機会だった。

⑤アクティブラーニングを行う時の心構え。
⑥いろんな人と意見をぶつけることができて楽しかった。大学側でもっと機会を作ってほしい。

⑤主体性について様々な人の意見が聞けました。自分の中で思っていたこととは違うこともあり、価値観が広がったように思った。また、教員とのワークを通して、学生には分からないこと（教員が考えていること）を聞けたので良かった。
⑥上にも書きましたが、教員との話ができたことが良かったです。他にも、他学部などの学生同士で話す場があって、意見交換できたら面白そうだなと思いました。

⑤他者の考えを聞くことで、一つの事柄から様々な見方が参加者の分だけあることが分かった。
⑥今回は、授業改善がテーマの一つだったが、学生、先生ともにやれることをやっていくことが大事だと気付いた。

学生

⑤社会（小中高大）の構造的問題が少しあるのかなと感じた。
⑥学生の未熟な考えでは教授に及ばず、対等な能力でWSできなかったのが悔しい。

⑤立場が違うと、また、学部が違うと、講義という一つの話題に対しても様々な意見があるのだと気づくことができました。
⑥教員の方とも本音でお話しできて参加して良かったです。

⑤教員の視点と、学生だからこそできる働きかけ。
⑥とても有意義でした。ありがとうございました。

⑤教員から授業を行う際に考慮したり、工夫したりする話を聞きました。それによって、先生の気持ちや立場が分かるようになりました。
⑥多くの学生・教員がもっと参加してほしいです。

⑤教員の方々が、今学生に対して何を求めているかを知ることができ、学生が思っていることに対してとのギャップが感じられた。

⑤「主体性」と「学びがいのある授業」が自分に関係あることだということを理解できました。

⑤教員の方の授業への工夫を知ることができて良かった。主体性を普段からよく聞いていたが、意味まで考えていなかった。具体的に知れて良かった。

⑤“主体性”ってなんだろうというところからたくさん考えさせられました。
⑥時任先生のレクチャーはとても興味深く、勉強になりました。

⑤教員の意識とのギャップを知れた。

⑤“主体性”って難しいこと、主体性という個人が頑張るべきことを、他人から引き出すということの難しさを得られました。
⑥先生方も大変苦労されているんだなということがよくわかりました。

⑤最先端の学びを知れた。
⑥また参加したい。

⑤教員や職員の意見が聞けて良かった。
⑥バインダーがあって、良かった（メモを取りやすかった）。

教員

⑤学生の考え方（他学部を含めて）を聞くことができました。
⑥教員、職員の参加が少なく残念に思います。

⑤学生の考えが聞けたこと。「主体的な学び」についての様々なアイデア、問題意識を知れたこと。
⑥教員、職員、学生でグループワークが出来て楽しかったです。

⑤学生の同調圧力の問題の大きさを知ることが出来た。
⑥アイスブレークが早い新しいスタイルは良かった。

⑤学生の生の声が聞けて良かった。
⑥ディスカッションが「主体的」になったので、これはレクチャーからの流れが一貫していたためと考えられた。

⑤Active learningの進め方。

⑤情報の共有はできたが、新規の発見はあまりなかった。
⑥実践的な解決策を見つけることを目標とするなら、議論の時間が短かった。

⑤主体的な学びのためのフレームワーク
⑥非常に良い取り組みだと感じました。本日は来てとても良かったです。たくさんの教員が参加できるとより良いのではと思いました。ありがとうございました。

⑤より、学生さんに問題意識や視点を明確にし、可能であれば共有できることが重要である点。

⑤教員としての教育責任と学生目線のアイデアの重要性を再認識しました。
⑥大学制度に関する話も多かったので職員の方も増えるとより広い視点から話ができると思う。

職員

⑤学生さんの意見が聞けて良かった。

今後、FD委員会で取り上げてほしいテーマがありましたら、ご記入下さい。（自由記述）

学生

- デュアルディグリー
- 集団をファシリテートする方法

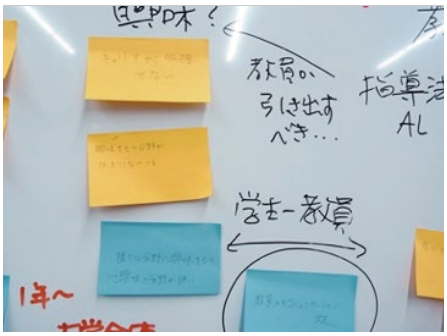
教員

- 英語での授業の効果的な考え方、学び方
- 大学は学びたい者が集う場として生まれた歴史がある。主体的な学びを促すことを考えなければならないという現状は、ある意味、大学という高等教育機関が崩壊しているということ。そのことに対する共通認識がないことが問題なのでは。つまり、教員が求めることと学生が求めることのギャップが生まれる。

※自由記述欄は、一部、誤字脱字等を修正し、掲載しています。

時任講師によるレクチャーの様子

グループでの活動の様子
（時任講師によるレクチャー＆ワークセクション）



ホワイトボードを活用し、意見やアイデアを出し合う

グループ発表の様子

鹿大版FDガイド第14号、第15号の発刊にあたって

～アクティブラーニングへの先入観払拭を目指して～

本学は教育改革の一環として、アクティブラーニング型授業の増大を目指している。アクティブラーニングは高等教育改革のコンテクストから、その必要性が主張され始めたのであるが、一方で授業担当者からの根強い反発も存在している。アクティブラーニングに関する多様な意見の存在、あるいは多くの議論の発生は好ましい事であるものの、実践を伴わない理念的な反対論ないし懐疑論も少なくない状況にある。アクティブラーニングに対する先入観のなせる技であるように思われる。「まずはやってみる」こともまたも必要であり、そのためには先入観の払拭を図るFD研修のあり方が求められる。

では、アクティブラーニングに関するネガティブな先入観とはどのような内容であろうか。おそらくは、「フィールドワークなど活動的な授業内容にしなければならず、大教室での講義には不適である、実践するのは大変だ」というものが典型ではないだろうか。アクティブラーニングは必ずしも活発な身体活動（先述したフィールドワークなど）を目的化しているのではなく、学習者の能動的な態度を引き出すことこそが目的である。活発な身体活動はアクティブラーニングの目的を達成するための1つの手段であり、学習者の能動的学習態度を引き出しうるならば、手段としての教育手法は多様であって良い。

高等教育改革の進行に伴って多くの実践事例が蓄積されてきているアクティブラーニングであるが、改訂された学習指導要領では「主体的、対話的で深い学び」と表現され、初等・中等教育においても求められるようになった。アクティブラーニングという用語そのものの解釈にやや混乱が生じていることから、学習指導要領では換言されたものと理解される。一方で、本学においてアクティブラーニング型授業を「まずはやってみる」雰囲気を創るためには、具体的な手法を提示することが有効であると考えられた。こうした理由から、学習指導要領で採用された表現をヒントにし、「対話的な教育手法」の幾つかをFDガイドにて具体的に紹介することとした。FDガイドで紹介した具体例は、本学教員の実践事例の他、他大学のFD研修会やシンポジウム等で紹介された事例を参考にした。

なお、平成29年度のWGメンバーは、大前慶和（法文学部、学長補佐（教育改善担当、現 地域人材育成プラットフォーム担当））、渡邊弘（共通教育センター、初年次教育・教養教育副部門長）、米田憲市（法文学部、司法政策教育研究センター長）、齋藤美保子（教育学部）、坂巻祥孝（農学部）であった。

（文責：大前慶和）

FDガイド第14号

FDガイド第15号

Ⅲ

鹿児島大学のFD活動

第2部

各学部・研究科のFD活動報告